



# アルコール依存症治療における 断酒と飲酒量低減

## 5

### 減酒外来にみる飲酒量低減から断酒に至る事例

The cases which achieves abstinence in the outpatient clinic accepting a goal for reduction in alcohol consumption



国立病院機構久里浜医療センター  
精神神経科 医員

湯本 洋介  
Yosuke Yumoto

国立病院機構久里浜医療センター 院長

樋口 進  
Susumu Higuchi

## Summary

アルコール使用障害者への減酒の選択肢は、治療の入口へのハードルを下げることや検査値の改善、quality of life (QOL) の上昇などに寄与することがいわれている。その一方、断酒の維持が最も安全で最良の方向性であるということは各国ガイドラインに共通の事柄として記載されている。国立病院機構久里浜医療センターでは2017年より減酒外来を開設しており、当外来の受診者のうち、1割程度の者が外来経過中に断酒の方向性を選択する、あるいは初診の段階で断酒の維持を選択する者が存在した。外来経過中に断酒の方向性を選択し維持した者は社会機能が安定し、国際疾病分類第10版（2013年版）(ICD-10) のアルコール依存症の診断基準該当項目数が2~4つ程度のケースが主であり、外来診療を中心とした比較的強度の低い治療で断酒に結び付けられる層の可能性があった。治療ゴールの多様性を許容したセッティングでは、受診者自身が主体性をもって自らの治療ゴールを選ぶことが変化への動機付けに繋がることを期待している。



### Key Words

減酒外来, Drinking risk level (DRL), 治療ゴール, アカンプロサート, ナルメフェン

### はじめに

国立病院機構久里浜医療センターでは、アルコール使用障害をもつ人々の相談のハードルを下げることを目的とした、減酒をサポートする外来治療の取り組みである「減酒外来」を2017年に開設している。当外来では開設以降、年間約100名程度の新規患者が受診している。当外来では減酒外来という名称を掲げつつも、初診の段階で断酒の維持を希望する者や外来での診療を継続しているなかで断酒の決意を固める者もいる。果たして、減酒と断酒ではその方向性によってもたらさ

れる転帰の違いはあるのだろうか。

### 減酒と断酒の転帰、各国ガイドラインの推奨

先行研究によれば、WHOの示すDrinking risk level (DRL) の低下は収縮期血圧の低下や肝酵素レベルの改善、quality of life (QOL) の改善と関連したとの報告により、減酒による身体・また精神面への一定の良好な影響が示唆されている<sup>1)</sup>。断酒と減酒の転帰の相違については、アルコール使用障害の治療後、DRLの低リスク群（1日あたりの純アルコール量：男性 1~40g、女